

月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

5-9

真紀は生来のいい女だった。

惚れっぽい女ではなかったが、深入りした男を忘れるために、新たな恋を求める性癖があった。それは都合のいいことに、仕事柄、容易に可能だった。

真紀は常連客のハードボイルド作家に、ママはアントンチェーフの短編小説『可愛い女』に出てくる主人公みたいだね。良く言えば、恋にストレートでピュアなんだよと揶揄されたことがある。

真紀はその短編を読んだこともあったし、『銀座博品館劇場』で舞台を観た記憶もあったので、さすがに作家の先生は上手いことをおっしゃると得心した。

大御所俳優に連れてこられた横田を初見した時も、『マーテル コルドンブルー』の水割りを供しながら、真紀は心が揺り動かされる独白の符号「あっ！」で、確信予想した。

「ママ、ジントニックをプレス・スタイルでもらえますか？」と横田はコニャックの水割りを一気に飲み干してから言った。

プレス・スタイルとは、特に欧米の報道機関の関係者がプレスビディアン・スタイルを言い換えたカクテルの処方で、従来はジンをとニックウォーターで割ってからライムを絞るのだが、トニックウォーターの甘みを緩和するために、トニックウォーターを半分にして、同量のソーダ水を加える飲み方なので、銀座の一流クラブといえども、当たり前で作れる知識を持ち合わせている店は稀である。

「プレス・スタイルですね。かしこまりました」と真紀は微笑むと、ボーイを呼んで耳打ちをした。

「好きなものを飲みなさい」

六十代の男優は、同席したホステス二人と真紀に勧めてから、横田が、いかにすごい日本画家なのかを吹聴した。

所在なげにしていた横田は、運ばれてきたジントニックを一口飲んで、満足げな表情を浮かべると、改めて店の格を値踏みでもするかのように、さらっと店内を見回した。

「貴女を描いてみたい」

横田は真紀をまっすぐに見つめると、唐突に言った。

「なんだなんだ！？突然!!お安くないね」

男優は苦み走った顔をほころばせると、身を乗り出して「横田画伯は本気ですよ！」と二人のホステスを証人に真紀を煽り立てた。

「ありがとうございます」と第三者が介入する余地をひと刷毛するかのように、真紀は少し間を置いてから横田を見据えて応えた。